症例経過：初回手術時年齢 27 歳 女性。X 年に右上 腕骨遠位骨巨細胞腫 診断にて前医で掻爬および骨移植術を実施された（愛知標本１）X+1 年および X+4 年に局所再発をきたし、2 回 再発掻爬術(最終手術 掻爬セメント充填 術)を実施され以後 局所再発なく経過していた（愛知標本２）。

X+4 年頃より多発肺転移をきたし、 著明な増大傾向なく 10 年程経過観察を行っていた。
骨粗鬆症薬 デノスマブが保険 承認され、X+14 年よりデノスマブ 60 mgを開始、
骨巨細胞腫に対するデノスマブ 保険承認を受けて、X+15 年デノスマブ 120 mgに変更され
継続投与されていた。
他の肺転移は縮小傾向を維持するも、左上葉 1 か所 腫瘤のみ増大傾向を認め、
PET に て SUVmax15.61 と高集積を示した。
X+17 年 10 月に胸腔鏡視下左上葉切除術を実施 した。
術後病理にて骨巨細胞腫 二次性肉腫と診断され(気管支断端部に腫瘍の露出)、
X+18 年 1 月に当科紹介となった。

【当院初診後経過】当院での病理再評価では腫瘍は骨形成と壊死を伴い高悪性度骨肉腫と診断された。
当科初診時 CT で 骨巨細胞腫の多発肺転移と術後の左胸膜播種を認めた。
AI 療法を 5 コース実施し、胸膜播種病巣は緩徐な増大傾向を示し、
X+18 年 6 月に胸膜播種病巣切除(横隔膜・左肺下葉・心膜合併切除)を実施した（愛知標本３）。
術後 GD 療法 2 コース後に胸膜播種 再発と著明 な増大をきたし、X+18 年 10 月より
Pazopanib 開始、7 カ月程 SD を維持されたが、
その後両側肺転移と胸膜播種の増悪を認め初回 手術から 19 年 9 カ月で原病死となった

愛知標本１	前医での初発掻爬標本	AP00-0011	1枚
愛知標本２-1.2.3.4.5	前医での再発掻爬標本	AP01-0015	5枚
愛知標本３(9枚)	悪性化後　当院での再発巣切除標本	P18-04053	9枚